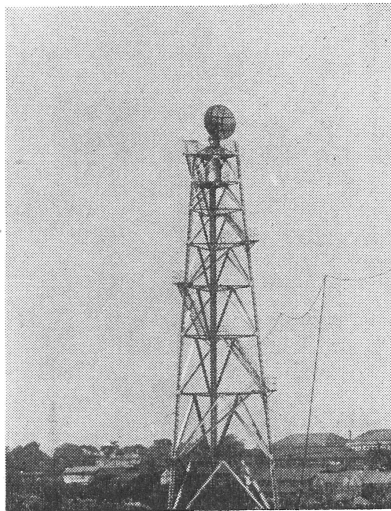


地方だより

東管レーダー係

昭和30年10月末から気象庁の無線塔の片方にはお椀型のパラボラアンテナが据えられレーダーによる気象観測が始まった。以後満3年毎日観測が続けられ幾多の貴重な経験と共に特にメソスケールの予報への利用の面で新しい分野が開拓されつつあります。又降雨の立体構造が分りますのでその生成機構等の研究等に利用されています。東京の気象用レーダーは現在東京管区気象台技術課に所属し地上観測係と共にルーチン観測を受持っています。レーダーは大きく分けてアンテナ部、送受信部、指示機の3つになりますがアンテナ部と送受信部は鉄塔の上に(地上高53m) 指示機はレーダー室にあります。周波数は5300MC を使用し最大探知距離は300km です。予報会報室の隣りにあるレーダー室は暗幕の帳に閉ざされた約5坪余りの部屋で指示機の他に反射計積装置や戸棚等がぎっしりつまって居り足の踏み場もない位です。昨年まで、夏期は百数十本の真空管の発する熱と炭酸ガスが部屋中に充満し数時間と作業を続けることが出来ない有様だったがルームクーラーが入ってからは作業能率も上がるようになった。又気象庁の建物のど真中にあるのでとかく問題にされるが我々は常に予報現業とは緊密な連絡を取り特に台風や雷雨のような時には予報課の要望に応じて万全を期



して努力して居ります。只惜しむらくは人員の不足等の行政面及び予報への利用等の技術面が確立されていないので研究的な面が多い現状です。さて現在行われている作業の内容を紹介する。先づ夏期の雷雨期間中(5月15日-9月15日)は9時, 11時, 12時, 14時, 15時, 17時, 18時の7回が定時観測, このうち9時, 15時は定時通報をする。冬期(9月15日-5月15日)は9時, 12時, 15時の3回定時観測で9時, 15時が定時通報, この他台風, 雷雨や大雨等の場合臨時観測通報を随時行う。又雨の反射(エコー)があれば35mmカメラ撮影, 特に注目すべきものは16mmシネカメラにより連続撮影を行う。観測はエコーを透明地図にスケッチしエコーの高さ, 強さや移動方向速度変化傾向等を記入し予報判断に資すると共にこれに基づいてレーダー気象報を作成する。この電報はJMC放送及びAIF(米軍航空関係)放送に乗せられる。このようにしてルーチン観測は行われていますが, 何と云ってもレーダーは新しい分野なので未だ未だ分らない点が沢山あり観測結果に対する要求も定性的なものより定量的な資料となる様になって来ている。この為に現在は気象研究所と共同で雷雨や台風等の観測調査を行っており又反射波積算装置(レーダー室内にあり)を使って面積雨量を出す研究も進めて居ります。しかし現業面では, 予報への利用が主目的であり従ってこれが適切に行なわれなければ有名無実になるだろう。今年は三度も台風に見まわれ大いにその威力を発揮したが地方へのサービスの点未だ未だ研究しなければならないことを痛感しこれらの改善及び発展に協力致して居る次第です。

(東京管区気象台技術課レーダー係 大貫益夫記)

